

■ 板橋（小田原市）のご紹介

～歴史的風致を生かしたまちづくり～

2026.06 Google AI に聞いてみた。

() : 私の独り言

小田原市板橋（いたばし）は、中世の箱根越えの要衝から始まり、近世の東海道宿場町の外縁、近代の政財界人による別邸文化の開花、そして現代の観光・居住地へと重層的な変化を遂げてきた、小田原市内でも極めて特異な都市形成史を持つ地区です。

その歴史的変遷は、大きく4つの時代に区分されます。

1. 中世～近世：東海道の「箱根口」と職人の町

・小田原用水の拠点（戦国時代）

天文10年（1541年）頃、北条氏康が城下整備に伴い、早川から小田原城下へ水を引く「小田原用水」の取水口を大窪に設置。この水路に板の橋が架かっていたことから「板橋」の地名が定着しました。

「小田原用水」は、旧東海道の裏道を通り、今の浜町のあたりまで流れて、城下の家々を潤しました。用途は主に飲用でしたが、小田原に近代的な水道施設昭和11年（1936年）完成が普及するまで、長きにわたり、生活の中で使われ続けました。



⇒ 早川にある「小田原用水」の取水口。ここから水を用水に取り込んでいった。

（自宅裏の水路が、由緒正しきものだったとは！）

・城下町の外縁と職人街（江戸時代）

江戸幕府による東海道整備に伴い、板橋は小田原宿の西の検問所（上方出入口）にあたる「箱根口」の重要な外縁部となりました。町内には職人が多く居住し、現在も残る「板橋地藏尊（宗福寺）」を中心に、人馬の往来で賑わう門前町・宿場周辺町としての性格を強めました。

『小田原染』『小田原藍』とも呼ばれた染物は、界限の職人たちにも人気となりました。その中心にいたのが、旧家・津田家の津田藤兵衛。津田家もまた、宮廷の染物にも携わったことから、京紺屋、の屋号を賜りました。



⇒ 旧京紺屋・津田家の蔵

（自宅前の道路は旧東海道。）

（自宅のお隣は、代々続く畳屋さんです。）

（津田さんは、前 小田原市の職員。地元自治会で、ご一緒させていただきました。）

2. 近代（明治～昭和初期）：政財界人の「別邸地」としての黄金期

明治中期以降、小田原周辺は温暖な気候と東京からのアクセスの良さから、皇族や政財界人の避暑・避寒地（別荘地）として急速に発展します。その中でも板橋の斜面地（天神山周辺）は、箱根山系を背に相模湾を一望できる絶好のロケーションから、最高級の別邸地へと変貌を遂げました。

・「数寄の空間」の形成

明治から大正期にかけ、電力王・松永安左エ門（耳庵）の「松永記念館（老梅庵）」、近代数寄建築の傑作とされる「皆春荘」（山縣有朋別邸、のちに細川護立が所有）、大実業家・古河河水（古河虎之助）の別邸などが次々と造営されました。

⇒ 松永記念館

実業家であり、小田原三茶人の一人・松永安左エ門が晩年を過ごした場所。昭和 55 年(1980 年)に小田原市郷土文化館の分館に。居宅「老樗荘」と移築された野崎廣太の茶室「葉雨庵」は国の登録有形文化財。



⇒ 古稀庵

第 3・9 代内閣総理大臣・山縣有朋が古稀（70 歳）を迎えた際、終の棲家とするために建設した。

相模湾と箱根山を借景にした庭園は傑作と名高い。

（毎週日曜のみ開園）



⇒ 皆春荘

第 23 代内閣総理大臣・清浦奎吾が別邸として建てた、数奇屋風の木造建築。

大正 3 年（1914 年）に古稀庵の別庵として編入。

小田原市の歴史的風致形成建造物。



（ここ数年、街歩きの方々が増えてきました 2024 年前期の朝ドラ「虎に翼（伊藤沙莉 主演）」で話題となった

「甘柑荘」も、街歩きの方々への名所となっています。しかし、近くのスーパーが立地し、古くからの商店街は衰退気味。板橋商店会は、解散となりました。）

・近代交通網の敷設

1888 年（明治 21 年）に国府津～小田原～湯本間に小田原馬車鉄道（のちの箱根登山鉄道）が開通し、「板橋駅（現・箱根板橋駅）」が設置されます。これにより、東京から別邸へのアクセスが格段に向上し、都市としての利便性と格式が同時に高まりました。

⇒ 箱根登山線・箱根板橋駅 昭和 10 年(1935 年)開業

（私の通勤時の利用駅です。平成 30 年（2018 年）に新駅舎になりました。）



3. 昭和中期～後期：生活インフラの整備と住宅地化

・郊外型住宅地への転換

戦後、別邸の多くは役目を終え、公的施設や観光施設、あるいは分譲住宅地へと解体・再編されていきました。小田原中心街や首都圏への通勤圏内として、斜面地の下方に広がる平坦部を中心に低層住宅地としての開発が進みました。

・モータリゼーションと道路網の分断

昭和40年代以降、国道1号線の整備や小田原厚木道路の延伸、箱根ターンパイクの開通など、広域交通の結節点となります。一方で、激増する自動車交通量に対応するための道路拡幅により、旧東海道沿いの伝統的な町並みが一部変容を余儀なくされました。

(板橋付近では新道(国道1号)が整備されました。旧東海道の幅員は、ほぼ従前のまま。)
(新道沿いにスーパーの立地が引き金となり、旧街道沿いの商店は衰退気味です。)

4. 現代：歴史的風致の保存と「文化的景観」の継承

現在の板橋は、開発の波を免れた近代建築群を地域のアイデンティティとして捉え直し、「歴まち(歴史的風致維持向上計画)」の核心エリアとして位置づけられています。

小田原市は、板橋を「板橋と南町の別邸文化に由来に見る歴史的風致」と位置づけ、次のように説明しています。

「板橋と南町には、明治期以降、政財界人などが建設した別邸を舞台に、茶の湯をはじめとした「別邸文化」と呼ぶべき様々な活動が現在も形を変えて引き継がれており、静かに佇む寺院群と地域に根付いた用水路などとあいまって、歴史と伝統が重層的に折り重なっている。

小田原市は、歴史的風致を守り育て、次世代に継承していくため、歴史的風致形成建造物を持続的に保存・活用するとともに、官民連携による面的な歴史まちづくりの展開を進めています。」 小田原市歴史的風致維持向上計画(第2期) 文化財課 歴史まちづくり係

CF) 横浜市歴史的風致維持向上計画 令和7年3月21日認定 都市デザイン室
重点区域：①関内区域、②山手区域、③みなとみらい21区域、④三溪園周辺区域

・歴史的建造物の公有化と公開

小田原市は、皆春荘や松永記念館、清閑亭(近隣の南町)などの歴史的建造物を順次取得・整備し、一般公開や民間事業者を活用したカフェ・イベントスペースとしての利活用を推進しています。

⇒ 旧内野醤油店(現在は非公開)

(小田原市は約3億円で買収した?(真偽不明)。現在、耐震工事中。地元民の多くは懐疑的。なにに使うの? 前所有者は、鴨宮の豪邸に移転。)



・「小田原の奥座敷」としてのブランディング

観光地化された箱根の手前に位置する「落ち着いた文化の街」として、古民家を活用したアトリエや飲食店が集積しつつあります。旧東海道の街路パターンを残しつつ、歴史的景観と現代の住環境を調和させる都市マネジメントが続けられています。

⇒ TEA FACTORY 如春園(旧下田豆腐店)

(「がんもどき」が有名な豆腐屋さんがお茶屋さんに。)



5. 歴史的資源を積極的に活用したまちづくりとは？

話題提供のポイント

- ・ 地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（歴史まちづくり法）
地域の伝統や歴史的価値のある建造物を市街地と一体で保全し、活性化させるための法律。
全国で100箇所以上の都市が国の認定を受け、歴史を活かしたまちづくりを進める。

小田原市：2011(平成23)年6月8日認定 文化財課 歴史まちづくり係

横浜市：2025(令和7)年3月21日認定 都市デザイン室

- ・ 評価ポイント：個人的な感想です。

① 地域振興への寄与

(この頃「まち歩き」の方々が増えてきた。認定後15年が経過、効き目は漢方薬？)
(新たな店はできたが、昔からの店は閉まってきた。観光地になれるか？)

② シビックプライド醸成への寄与

(地域で観光地化を望む声は少ない。小田原市は妙に熱心。)

③ 観光振興への寄与

(市は「歴まちマップ」を作った。歴史的風致形成建造物：5棟 候補：6棟)
(板橋は「別邸文化に由来に見る歴史的風致」としているが、魅力的なの？)
(派手さやきらびやかさは少ないが、渋さで勝負か？)

④ 国の補助金・交付金の活用効果

(道路改良工事(側溝改修・景観舗装)の実施。)
(案内板(道標)の整備、散策マップの作成)

【参考】 歴史を感じる街歩きマップ(歴まちマップ) 板橋コース

(興味がある方は、のぞいてみてください。)

箱根板橋駅からスタートし、戦国～江戸時代創建の寺社、別邸文化にゆかりのある歴史的風致形成建造物などを巡る、閑静で趣きのあるコースです。

所要時間：約1時間 総距離：約3.0km

<https://www.city.odawara.kanagawa.jp/field/c-planning/rekimachi/p08220-copy.html>